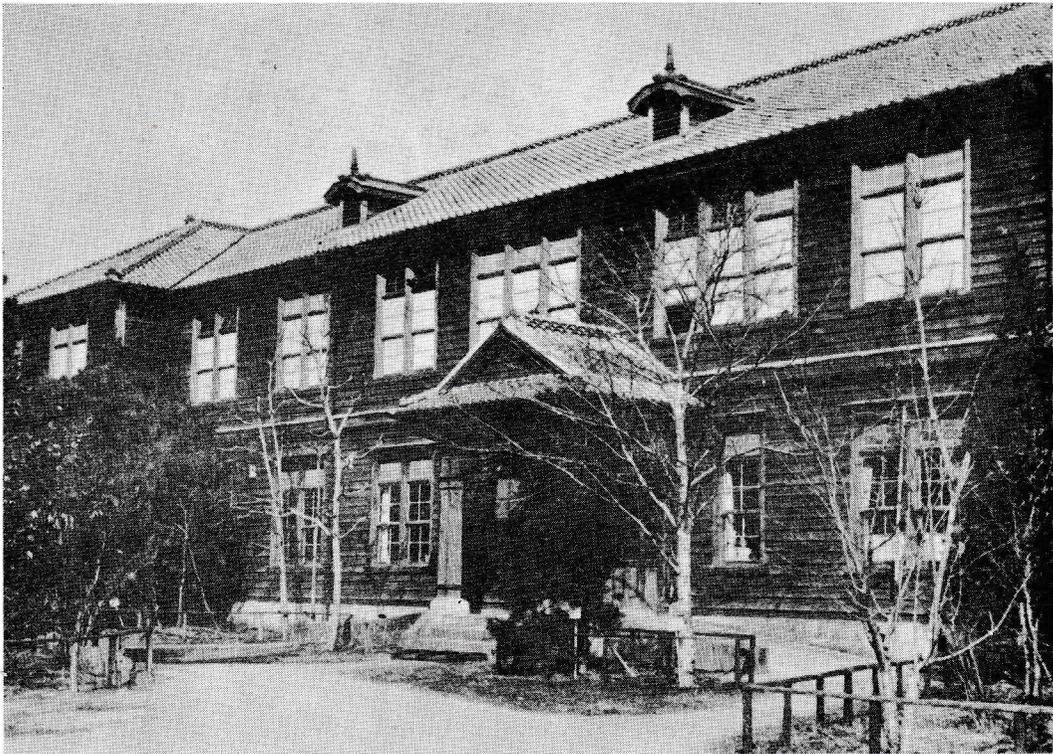


静中静高同窓会関東支部

会報 (創刊号)



大正五年五月制定

静中静高校歌

作詞 吉丸一昌
作曲 島崎 赤太郎

一、岳南健児一千の

理想は高し富士の山

八面玲瓏白雪の

清きは我等の心なり

二、至誠を色に表はせる

唐紅の旗幟

義勇奉公四つの文字

掲げて共に進むべし

三、龍爪山の木枯しに

青葉が岡の夏の日

身心鍛ふ大丈夫

文武の道を励めいざ

四、御国の柱礎と

なりし祖先の後継ぎて

大現神天皇の

稜威を四方に輝かせ

ごあいさつ

関東支部会長
宮沢次郎

わたくしたちが、年令を忘れ、仕事を離れ、いつまでも中学生（高校生）でいられる、心から楽しい会がこの同窓会です。また、忙しい東京の都会の中にいながら、わたくしたちが、共通のふるさと静岡の地に心を帰らせることのできるのも、この同窓会のおかげだと思えます。そして、どうかこの同窓会に、一人でも多くの同窓の方が参加して、会の内容をより豊かな、より楽しいものにはぐくんで頂きたいものだ、しみじみ思えます。

今回、ご担当の幹事の方々に、ご多忙中大変なご尽力をわずらわせて、この会報の創刊となりましたことを深く感謝申し上げますと同時に、会員皆様様のご協力によって将来この会報が、会の発展のために立派な役割りを果たしてくれますよう心から祈る次第です。



会報発刊に当って

静岡静高同窓会会長
鈴木与平

昨年六月三日、静岡静高同窓会関東支部が発足してやがて一年になります。その間、支部宮沢会長さんはじめ多くの同窓生諸兄のご尽力によって支部の活動は順調にすべり出し、顧問会、幹事会等が相次いで開催されるとともに、今度は支部会報発刊にまで漕ぎつけられたご努力には全く敬服のほかはありません。

同窓会というものについては、会合の折に申し上げておりますように、卒業なり修了と同時に自動的に会員になる、またならざるを得ないものを本質的に持っているといえましよう。

しかし、それだからといって、こと同窓会の活動となると話は別になり、運営上会員との連絡、財源の調達などの問題で、普通の団体のようにはいくまうかかないのが実情であります。

縦だけの組織といたしますと、先輩だけの同窓会となり、若い人達は参加してこない。反面に同級

会、年次会となると集ってくるのであります。

私は会長就任以来この点について苦慮しましたが、結局、同窓会というものは縦の組織、地域の組織であるとともに、年次別の横の組織をこれに組み合せ一つの布のように織り成すのがよいと考えました。

そこで私は同窓会の活動の一環として同期会の開催を、また統合組織として地域別同窓会（支部）の結成を勧奨申し上げたのであります。

同じ静岡・静高を出たという統一性のなかに、職業や年齢の違いはありますが、人と人との触れあう場としても利用できるのは楽しいことでもあります。

東京を中心とした関東支部は、実際には本部よりも重要性を持っている大きな存在であることは、地方所在の学校同窓会の共通性でありその意向で関東支部の発展は静岡・静高同窓会の発展に繋がるものといえましよう。

昭和五十三年に迎えようとする母校創立百周年に対しても、いよいよ本格的準備体制に入ることになります。その点でもどうぞ関東支部諸兄のご協力ご支援を心よりお願い申し上げます。

今昔思い出の記

憶い出

土屋 正 三 (26回)

先日、井上彦左衛門君の訃報に接したので、二十六期生の生存者は金谷正夫君と富田毅一郎君と伊藤俊一君と筆者の四人になってしまったようである。同時に卒業した者は八十二、三名かと思う。富田君には先般お來訪を受けた。そのときの話しで、新緑のころ二人で日光に金谷君を訪ねることにしたので楽しみがひとつふえた。伊藤君は一昨年頃同窓会報を送って頂いて以来消息を聞かないが、元気なことと思う。

筆者が静中に入学したのは明治三十九年四月のことであるから、日露戦争のすんだ一年後である。あの戦争では首山堡の激戦で、歩兵第三十四連隊は連隊長関谷大佐以下ほとんど全滅した。なかにも勇名をとどろかせたのは橋大隊長で、軍歌にまでその名が残っている。当時の静中は県下に五つしか

なかった県立中学校の筆頭で、今日の静岡大学のような地位にあった。県下各地から生徒が集まり、寄宿舎に入っていた者が多数あったと思う。

先生をあだ名で呼ぶことは昔も今も変わらないと思うが、国漢の塩崎先生はポテさんと呼ばれた。あばた面からいもとなりポテとなっのかと思うが定かではない。相当年代のかゝったあだ名のようにであった。同じく国漢の山田先生は猫さんと呼ばれた。その上に盗人の頭文字をつけて盗人猫と呼んだのはまことに失礼の極みであった。従ってこの先生は猫からはじまっ

に悪童どもは技巧をこらしたものであった。

その山田先生がある日、三年何組かの教室に入ってみると、あろうことか黒板一杯に猫の絵や文字が書き散らしてある。真赤に怒った先生が消そうとしたが黒板拭きが見当らない。そこで卓子の引き出しをあけると、なからねずみが一匹飛び出した。もとより悪童どもの仕業である。授業も何も滅茶苦茶となり、先生は憤然と職員室へ引き上げてこの始末を報告したと見える。

ところが同じ時間に、四年甲組でも同じような事件があった。それは筆者の組である。たまたま図画教室で用器画を教えた土佐先生——この先生は土佐派の名家の出身であったそうである——が、黒板を埋めつくした作図を消そうとしたが、黒板拭きが見当たらないので卓子の引き出しをあけたところが、なからねずみが一羽飛び出した。すずめを引き出しに入れておいた犯人は実は筆者と、後で県

の子が一羽飛びこんできた。三人でひねり廻しているうち動かなくなった。おりしも次の時間のラッパがなったので教壇の卓子の引出しになんの気なしに入れておいたのが蘇生したものと見える。土佐先生はいたって洒落な人であったので笑ってすんだのであったが、職員室へ帰って見ると山田先生がカンカンに怒っている。事情を聞いて、土佐先生が四年生の教室ですずめが飛び出した報告をしたので大騒ぎとなった。三年と四年の共同謀議であろうとの疑いが生じたのである。筆者は既に帰宅していたのであったが、後に北大の教授となった久次米三夫——当時は寺沢三夫君——が副級長で、級長の筆者の宅へ青くなつてかけつけてきた。何分にも級長が犯人であるから——もつとも寺沢君はそのときは筆者が犯人とは知らなかったのである——厄介である。

格別悪意があったわけではないので、結局、近藤君と江川君が犯人であったと自供し筆者がすずめよりも再びごんないたずらはしませんと級長として宣誓することで納まったが、三年の方はなかなか犯人が出ないので、何日も放課後留め置きをくつたようだった。半世紀以上昔のいたって無邪気な悪童物語である。

今日の校舎は立派なようであるが、当時は木造建の粗末なものであった。中村という校長がやかましい形式主義者で、廊下を毎日ブラシで洗われた。隣の教室との境をとくに磨き立てて、掃除に熱心な振舞を示す組もあった。後に地方官となったとき、道路の隣界との境界の部分に特に手を入れてあるのを見て、中学の廊下を憶い出して苦笑したことであった。筆者の卒業後もますます汚くなったものと見え、昭和五年に、はじめの地方行事で静岡県を御巡幸になられた天皇陛下が静岡中学にもお立ち寄りになるので、当時内務省警保局の警務課長であった筆者は、御警衛下検分のために母校を久し振りでたずねる機会に恵まれたが、そのとき同行の係官が、こんな汚い学校に行幸を仰ぐのはおそれ多いといひ出したには弱った。冗談いうな、これは私の母校だよといつて、勸弁して貰うことができた。

そんな汚い校舎でも、周囲は竜爪山麓まで続く一面の田圃で、富士山がいつも眺められた静岡中学は、いつになつても、まことになつかしい我が心のふるさとはある。

龍爪会のこと

岡本 敏 興 (32回)

同窓会関東支部の井出多米夫君 (42回) が訪ねてみえて、こんど支部で会報を出すことになったので、龍爪会のことを記事にしてくれとの依頼があった。

実は、龍爪会は、われわれより二、三回後の諸君が始められた会であり、当時町井吾六君 (34回) 長谷川生浩君 (35回) あたりが世話役として活動されておったが、ある時、会長格の前田鉄三君 (32回) から、今後はお前が世話をしろと命令されて、三井物産の激務にある同君の手助けのつもりで、私が面倒をみることになった次第です。

そこです、会員名簿の作成配布にとりかかった。会員は大体、私達の級がトップで、中出君あたりまで前後十年位の中の在京の方々が中心であった。私達は明治四十五年、即ち大正元年の静中入学で、昭和六年の卒業だから、それから十年の間ということ、大体大正時代に静中に学んだ連中が中心メンバーといつて差支ないだらう。

私の手許に今残っておる、昭和三十一年十一月現在「龍爪会々員名簿」に載っておる会員数は八六名である。そのうち33回卒業が二名で最も多く、34回から36回までが、それぞれ一四名二三名三名で、この四クラスで五九名を占め323839各回が四名づつ、42回六名、その他のクラス合せて九名と云った内訳になっている。

さて、龍爪会は年に一、二回会合を開いたが、懇親が主で、少年時代の腕白ぶりやいたづら話、野球のこと、先生の回想など昔なつかしい懐かしい話に花が咲くのが通例だったが、時々食事の前に講演を聞いたこともあった。実業界では水野成夫 (33回) ・牧田与一郎 (35回) ・鈴木万平 (36回) 諸名士の参会もあったが、今やこの三君ともに亡き人となったのは、誠に寂しいことです。その他、学者・教育家・官界・医学界など、多方面に活躍されておる諸君を網羅しており、実に多士済々といえ

る。

また時折は有志でゴルフを楽しむんだこともあった。志田了介 (32回) ・小田三千雄 (34回) ・志田二四男 (39回) の諸君や牧田君・前田君などの参加もあり、我孫子コースで稲垣直文君 (33回) が優勝したのが、最後のゴルフ会であったかと記憶している。

かくて、龍爪会は愉快な会でお互親睦を深めてきたが、私も後を大村已代治君 (33回) にお願してお暇を頂いたが、その後熱心な世話役だった長谷川君が亡くなられたなどの事情もあり、会も自然

体会が多くなり、そのうち同窓会東京支部の大会が開催された機会に、自然その方に移行し、更に昨年の同窓会関東支部結成の端緒ともなったものと考えている。

「岳南健児」一千の理想は高し富士の山の校歌が制定された当時在学し、「龍爪山の木枯に。身心鍛えた」少年も、今や還暦から喜寿の老人となり、また身辺の親しかった友人も、段々数少くなりつつあり、誠に感無量、懐い出は尽きないが、与えられた紙面の制限もあり、これで筆を擱くこととする。

汽車通学

寺尾 琢 磨 (34回)

兄 (寺尾俊平・医博・本年三月死没、享年八二才) と入れ替わってわたしが静中に入学したのは明治四五年 (大正元年) で、当時は

県全体で男子の中学は五校しかなかったから、遠方の生徒も多かった。校内に大きな寄宿舎があったが、収容力は知れたもので、大半は自宅からの通学を余儀なくされた。バスなども無い時代だったか

ら、汽車が唯一の交通機関で、こんな連中は「汽車通組」と総称され、その数は相当なものだった。

わたしもその一人で、毎朝清水の自宅から駅 (当時は清水駅といわず、江尻駅といった) まで二十数分を歩き、七時十二分の汽車で静岡駅へ、そして朝礼式に間にあうよう半ば駆け足でかけつけたものである。寒稽古の頃は四時半の汽

車でなければ間に会わず、ずいぶん辛い思いをしたものだが、送り出す母は一層そうだったろう。ところが、そんなにまで苦勞し通学する汽車通組を、学校はひどい色眼鏡でみていたようで、汽車通といっただけで、まるで不良生扱い。操行点は丙か、せいぜい乙で、甲を貰ったのは卒業間際の、それも僅か数人だった。わたしはどうとう甲は貰わずまい、世にも謹厳だった兄もまた同じで、母をガツカリさせたものである。

なぜこんなことになったのか、よくは判らないが、理由はどうも食物のことらしい。食物屋への出入は校則で禁止されていたから、反則者は犯罪者というわけだが、それが汽車通組に圧倒的に多かったからである。もちろん腹のへるのは汽車通組には限らない。このころの年齢なら当り前で、昼休みに見張りを立てて、裏門横の柵をのりこえ、門前の鰻焼を買うくらいは誰でもやったことである。余談だが、わたしが慶応高校々長時代、急の用件で昼休みに全生徒を集めて訓話することになり、教師達に十二時半からどうだろうと提案したところ、曰く「そんなに待つ必要はありませんよ。十一時ごろまでに弁当箱は空になっていま

しよう」。生徒達の旺盛な食欲に驚くと共に、上等弁当に箸もつけず、胃散を飲んで自分の腹を顧みて、われ老いたりの感を深くした次第である。

さて、鯛焼程度だと学校もそれほど目くじらは立てなかったが、汽車通組にとっては聊か事情が치가う。いまと違って一日に数本しか汽車のなかつた頃だから、一つ乗りおくれれば二時間も三時間も待たされるわけで、何かつめ込まなければ腹の虫がおさまらない。

つい、そば屋へ忍び込んで金三銭のカケそばをかぶりついたとしても、さほど不思議ではあるまい。だが学校は勸弁してはくれない。違反者は跡をたたく、それが重なって、汽車通すなわち不良生という一つの方程式ができ上つたらしい。半世紀以上たった今日、恐らくそんな方程式は残っておるまいが、当時の汽車通組はいまでも依然とはしていない。大体、甲乙丙丁で操行を評価するなんて乱暴な話で、いまでもそんなことをやっている学校があったら大いに反省して貰いたい。

わたしは慶応高校の初代校長を仰せつけられたとき、はつきりした善行は表彰、はつきりした非行は処罰、それ以外の操行評価は一

切無用と教師連に申し渡した。中学時代の思い出が頭の隅にこびりついていたからであろう。

汽車通のため操行「甲」は棒に振ったが、マイナスばかりではない。汽車通組は一緒にいる時間が長いので、互いの気心もよくわかり、温い友情の芽生える機会に甚だ恵まれた。中学時代のわたしの友人は、大抵この仲間であった。また時間厳守の習慣もそのときの

思い出雑記

諏訪 卓 三(旧学校長)

上田尚亮君からの手紙には「同窓生として、また母校の恩師として、校長先生として」思い出を書いてほしいとあった。私は残念ながら掛川中学の出身だが、上田君が思い違ひをすくらしい静中静高に縁があることは光栄である。

掛川の生徒の頃、静中野球部が遠征して来て、猛打を浴せて掛中を圧倒するのを見て、口惜しかったり羨ましかったりしたことを思い出す。田舎者の私が、昭和十四年から六年間静岡中学の教員を勤め、その間、戦争末期に野球部長解散するまでの数年間、野球部長

産物で、時間にうるさい外国人との生活も一向苦にならない。もう一つの産物は、毎日長距離を歩いたり駆けたりしたおかげですっかり足腰を鍛え、後に登山やスキーといった健康なスポーツに熱中することができたことである。喜寿の今日、依然、外国を股にかけ廻っていられるのも、廻れば原因は汽車通にあるようである。

ある以上、天下の英才を集めた学校で教えることが最大の楽しみであると思っていた。そして静中の教師六年間は特にその喜びを味わせてくれた。英才といえども学校での勉強以外のことに熱中すれば成績が上らないのは当然で若い者には有り勝ちなこと、従って学校の出来不出来が自然でできるわけだが、私は静中の生徒諸君を私の教える教科の成績のよしあしで最終的な評価をしようとは思わなかった。それぞれの諸君にいい素質を見極めようとした積りだった。

一昨年の秋、五十九期の諸君の集りがあって招待を受け行ってみると、二百名あまりの卒業生の中で実に生存者の半ばを越す百九名の人達が出席しており、学校時代の成績の如何を問わず、社長・教授・役人等々、職業は多種多様であるが、皆すぐれた生活者になっていた。「やはり君等は英才だったな」と、私は鏡を抜いた大樽から一人一人が持つ枀に酒を注ぎながら、感慨ひとしおであった。

当時は、それぞれ自分の勉強は適宜やっていたのだが、今みたいに大学の入学試験勉強にがつがつしている様子はなかった。私共教員は自分の信ずる方法で教えていて、上級学校への受験ということ

は今ほど意識していなかったと思う。それでも、ほとんどすべてのものが自己の志望を達成して進学していたようである。

とはいっても、受験の為の補習授業をしなかつたわけではない。昭和十五年一月十五日、二階の教室で補習授業をしているとき、新富町から出た火事が大火になったのを知った。その火事の跡片付の手伝いに生徒が出た。彼等が焼跡から拾って来たが、まの置物が、次の日、私の授業の時、教卓の上におかれていた。たしか五年四組である。私はその時、自分がどんな顔をしたのか憶えていないが、恐らく苦笑したであろう。しかし内心は愉快であった。私のあだ名のがまを焼跡から拾ってきた教卓の上におく親愛感とユーモアが嬉しかったのである。当時のいたずらは人間味のある、おもしろな遊びが多かつたようである。そういういろいろおもしろさが静中にはあった。

最近ある口頭試問の際、静高の生徒に、静高が彼等に与えた印象をきいてみると、おおらかで自由な空気が校内にあるのがよいと一人ならず答えるのを聞いて、そういう伝統が脈々と続いて、しかも気品のある校風を作っている静中

静岡の高さを感じた。
昭和二十年六月十九日の夜の空襲で、古い懐しい校舎が焼けてしまった。生徒の靴ですりへったあの階段も、数々の彫刻のある机も。その数日後、まだ余燼のある焼け落ちた校舎の前の運動場で生徒に別れの挨拶をした私は、それから十六年後、今度は校長として静岡に赴任した。その時には既に野球のバックネットの後ろにあつた。

戦後の静岡

三 木 卓 (70回)

静岡中学をはじめて見たのは昭和二年のことだったと思う。わたしは小学校五年生で満洲から引揚げて来て、西草深町の親類の世話になって安東小学校へ通っていた。わらざうりてアスファルトの道を歩いてると左側に静岡中学の敷地が見えてくるのだった。
中学は空襲でひどい目に会っていた。校舎はすっかりなくなっていた。残っていたのは柔道部の道場の建物ぐらいで、プールは空のままあったが、体育館は天井のぬけた残骸として辛うじて壁だけが立っていた。

た銃器庫はなく、バックネットも位置が変わっていた。私の校長時代に、テニスコートの脇にあつた物置(昔の寄宿舎の建物の一部)を取こわした。この古典的な建物を取払ったのは、そこへ図書館を建てるためだった。しかし、二年間の私の勤務中はそれが果せず、後任の校長さんの時になって、今の立派な図書館兼同窓会館が完成した。

敷地には罹災者のバラックが沢山立っていて、呆れたことに校庭はたがやされていて畑になっていた。わたくしは横目でおしめのひるがえっている物干をみたり、はいまわっているさつまいものつるや薬をながめて、もうここは中学校にかななるまいと思っていた。
その頃の中学はどこにあつたのかはわたしは知らない。その焼跡では、野球をしたり(わたしは足がわるくて出来ないから審判)して遊んだ記憶はある。わたしが存在を知ったのは、城内の静岡三四連隊の兵舎にしている時からである。

る。わたくしは、となりの城内中学の生徒だった。新制のたしか静岡一高という名称で、そこにあつたのである。

あの高校にはいりたい、とあこがれたが、特に魅力があつたのは野球の強いことだった。進駐軍チームとたたかつて、七回までに三十三対零とひきはなした試合などがあつて血をわかせた。森山という小兵の投手と中尾という豪快な捕手のいた頃である。わたしの二年下には、あとで立教大学や東映フライヤーズで活躍したハンサムな種茂捕手などがいたし強かつたけれども、毎日ネット裏にへばりついて見ていた。この時代の野球部の方がどうもブリリアントに感じられる。
入学したのは昭和二十六年で、そのころは、城内高と呼ばれていたが、その兵舎で学んだ。入学して最初の朝礼のとき、二年、三年の上級生の列のどよめきが大い男の声で、地ひびきのように聞えて仰天したことを思い出す。いい教師もいたし、いい生徒がいた。優秀な連中には事欠かなかつた。三年間、そういう人々に圧倒され、負けたくないと思つて、自分なりに意地を張つてみた。今ふりかえつてみると、すばらしく恵まれた青

春だったといえる。わたしは、そのことを、大学以降の体験よりも有難いことと思つている。

もう校舎が建つまい、と思つていた旧敷地に、今の校舎が一つだけ建つたのが、われわれの一年の終りのときである。三年生は最後の一月ほどだけその校舎を使わせた。

五〇年度支部活動の概要

- ・五〇年六月三日 結成総会。
- ・東京会館で三四〇名が出席し、支部規約を定め、役員を選出し、盛大に懇親会を行った。
- ・六月一七日、同二五日、世話人会総会報告、今後の運営、顧問推挙に就て協議した。
- ・七月一日 幹事会
- ・各期幹事等四五名出席、今後の運営を各期級会基盤で行う事を確認し、会費・名簿の件を決定した。
- ・九月一〇日 事務打合せ会
- ・一〇月二日 顧問懇親会
- ・麴町「なば」に於て二六回土屋正三氏等二十二名出席し、往時近事の話等和我かに行はれた。
- ・五一年一月二七日 新年懇親会

東京商工会議所ビルにて五七名出席して行はれ、五〇回村松喬氏の講話、五〇年末までの経過及び会計報告、五一年度事業予定及び

てもらつて卒業していった。その翌年が、七五周年にあつたのではないかと記憶する。記念の絵葉書写真をもらつた。百周年になろうとしている今、校舎の汚れ具合を望見する折など、つくづく時が流れたと思う。

予算見透しの報告並びに常任幹事制、支部基金設置に関する会長提案があり拍手を以て了承された。

・三月四日 役員会

五一年度の運営に関して審議、総会を六月三日行ふ事とした。

・四月二日 幹事会

五一年度事業計画案、予算案、総会、会報、名簿、基金募集案、年会費引上げ案等を審議した。

五十一年度事業の概要

行事

総 会 年一回(六月三日)

顧問会 年一〜二回

幹事会 年三〜五回

此の他懇親及同窓生の各界名士の講話を聞く会を企画する予定

会報

年二回発行

名簿

51年度版発行、総会出席者に配布



各期便り

四二回

我々よんに一會も来年は、卒業五十年を迎える。そろそろ古稀に手のとどく頃になった。当時、一九〇名位だった級友も、昨年末でその三分の一（七〇名）が故人となった。しかし静陵生活五年の間に培われた友愛の絆は、年と共に強く、きれることはない。

我々の自慢の一つは、大正十五年、母校の名を天下にとどろかせた甲子園大会優勝の中核選手を送りだしたことである。しかし、名捕手福島君も、健棒戸崎君、名野手松浦君も今は亡く、菊地（旧姓本多）君一人健在。往年の井出応援団長は根っからの世話好きから万年世話役として欠かせない人である。かねてから懸案の同窓会関東支部も、同君の首頭取りで、特に奥野、月見里両君（共に53期）の献身的の協力を得て、昨年六月に無事結成をみた。まことに喜ばしいことと思う。当時の経緯から執行部並びに顧問として宮沢会長以下数名の級友が参画し、ひきつづいて支部の基盤作りに奉仕する

四四回

静中・静岡同窓会東京支部の発足を契機として私達東京近辺在住者も卒業以来始めて一堂に会することになった次第である。多士済々、夫々、個性の強い仲間が多いが、こくクラス会ともなると、仲々集りもよい。大会は年一回、十一月中旬静岡でやっているが、在京での有志の会合は随時随所で、たのしく行なわれている。現在の会長は森嶺君（静岡安田屋旅館）で柔軟性に富んだ人柄で仲々評判もよい。この頃では「お互に長生きしよう」が、どうやら、合言葉になってきた

（柳川太郎記）

結婚式にはものすごい費用がかかると思う。親の身にしてもできるだけのことをしてやりたいのはわかるが、中にはヤクタイもない金のかけかたをしてい

式はカテドラルで

るがある。

また営利を主に、式はベルトコンベアみたいにそそくさとやっている会場も多い。そこで私のところでは華式したらどうだろ

に、銘々の近況報告やら人生報告で話しが尽きず、漸く昔の記憶がお互に甦った頃には早くも閉店の時間になってしまい、己むを得ず来春の再会を約して一応おひらきにしたが、岡崎君の案内で二次会に出かけた人もある。とうに還暦を過ぎ、中学時代の面影とは大分違うけれども元気に活躍中の級友が多い。当日記念写真を撮らなかつたのは誠に残念であるが、次回は忘れずに撮ることにしよう。

また、昨年の結成総会には、消息の確認できた会員16名中13名出席し、私にとって静岡卒業以来初めて顔を合わせる人もあり、お互い手を握り合い肩を叩き合って久闊を癒したものである。しかも全員がそれぞれ極めて元気で未だ第一線で活躍するものあり、あるいはひと仕事を終えて第二の仕事に打ち込むものありなど多士済々、意気盛んなものであった。

昭和四年卒業であるから実に四六年振りの再会の顔もある。堀君寄贈のマッキンレーのグラスを手

- 岡崎道夫 長田寿雄 小沼 武
- 加藤好三 川江美雄 佐藤文三
- 塩坂仁雄 高橋真一 外川 誠
- 成川利男 堀 豪三 長野寿一
- 増井陸郎 村井東助

（村井東助記）

四五回

第四十五期の同期会は村松圭三君を中心とする幹事諸君の世話で昭和三十三年以来殆んど毎年静岡市及びその周辺を会場として開かれて来た。毎回三〇〇四〇名の参加があり、お互い旧交を温め合っ

況と情報を得たりしていたが、関東地区からの参加者は会場が静岡市ということもあり、また、連絡先不明の人もあって比較的少かったようである。それが、昨年この関東支部結成の案内があった機会に同窓会名簿を頼りに勤務先について調査した結果、関東地区在住会員の大部分についてその後の消息が得られたことは大きな収穫であった。

（鈴木亦門記）

四六回

四十六期会は本校に於て、同級生一同の還暦を祝い、物故者の冥福を祈ってクラス会を開いたのがすて、二年前浅間神社廿日会祭の日でした。この日は恩師高原、

金沢、西田の三先生も御元気で御出席でした。また昨年二月には、伝馬町の安田屋で、我等が同期生山本静岡県知事にも御多忙中を御無理願ひ、48名の出席でした。

今年三月二十八日に同じく安田屋で一年ぶりの開催。本告先生をお迎えして、三十三名の出席でした。何回会合しても昔話は尽きることなく、どうかすると卒業以來はじめて会う同級生もあって、肩をたたき合います。現在の話題になると、頭髪と孫の話が多いのは、矢張り年のせいだ。

一人でも多く、一年に一回はお互いの元気な顔を見たいもの、東京支部の諸兄とは、今年中に一回計画しています。

(阿部俊一記)

四七回

関東にも同期20数名が在住するが、残念なことに平素接触に乏し

い。然し便りのないのは無事のしるしか、会えば「やあ、やあ」である。皆この輪にもなれば多少の云う処はあつても、夫々第二の人生なり、亦依然第一の人生を、岳南健児一千の意気をもって敢闘中の筈である。

昨年秋、熱海での47同期会の模様については50年12月1日「静岡高同窓会会報」に47回のボス通称へイケ高橋が、簡潔にその盛況を伝えていた。標題に曰く「大野先生は81才」、恩師のご参会はその他に望月もちゃん、西田太公望、小沢アヒルのお三方。甲府の奥、静岡、名古屋、古河と夫々遠路はるばる平均年齢76才が、かくしゃくとご来駕。楽しいではないか。

さて、今年51年度の集りであるが、いつも菜をしいる関東の連中にも世話人の苦勞を味あわせると云うのか、静岡から同窓会の新副会長小山とへイケから、「古都鎌倉辺りでやれ」との致命、鴨谷博士も山上長官もいるけれど、片山二墨手と相談して纏めろとのこと。謀事は密なるを以てよしとする云うが、一応の予告編とご承知願ひたい円覚寺辺りで座禪を組み、精進料理を食らうのも一策である。そろそろ悟りを開いても

よい頃であらう。なお、関東支部47同期会の会費納入率は良好の筈、一言宣伝して置く。

(今関智吉記)

四八回

我々四八期の同窓会開催の幹事は静岡側と東京側とで交互でやることになっていく。このため東京側が当番の時には、前もって計画立案のため従来再々にわたつて下打合せをもっている。

この打合せには、福永君が会員になつていて帝劇八階の日本クラブが常席になつており、大橋、加藤、寺尾、鍋田、日比野、福永と小生といった面々が集まることになつていく。いわゆる自称東京側の世話人である。目的は前記のよくなことであるが、実のところ話

のあとで新橋の「こたか」に行つて一杯やるのが重要で、これが楽しみで集まつて来るようなものである。

ところが昨年暮この「こたか」が店じまいしたため、このところ日本クラブ内のスタンドバーでせいぜい水割一〜二杯ということになつてしまった。我々も、もう六〇の還暦を迎えこの程度が身体のためにも良いのかも知れない。これからはこの集まりを拡大し、東京在住の仲間毎月一回程度集まりたいと考えている。実は二月七日東京側主催で、南伊東山宜園一泊どまりで同窓会を開催したが、このときも数回打合せをした次第である。

(原崎進一記)

四九回

関八州で活躍の諸兄、健在なりに意義のあることと思ひます。

今後

創刊号は取急ぎこのような型となりました。内容・スタイル等御意見をお待ちします。

原稿を

昔の話、今の話、紀行、隨筆消息等を、この「同窓生」の広場」にお寄せ下さることは非常

会報について

読者の声、趣味、相談室などの欄も設けたいものです。

や。

今や、還暦を祝うころ。

亀爪山の想い出を語り合ひ、八面玲瓏の富士の嶺を仰がん哉。

戦後の東京支部のあゆみ左の如し、報に依じて馳せ参ぜんことを祈る。

- 三一―四―二六 東京駅みかど
- 三二―一―二六 福神商店
- 三四―一―一二 みかど
- 三五―五―一七 みかど
- 三七―九―一五 佐友クラブ
- 三九―九―一〇 住友クラブ
- 四二―一―二八 ニーオータ
- 四三―一―〇一 八 鯉の浦
- 四五―二―二五 鯉の浦
- 四六―三―一六 ステーション

ホテル

(東京同窓会と合同)

折角、御自愛御專一を祈る。

(菅沼 栄記)

会誌名募集

会報にまだ名がありません。良い名を募集します。締切八月末、事務局まで。多数の名案をおまちしております。

次回発行

五一年一月の予定

五〇回

私たちは旧制静岡中学の五十期生、昭和五年に入学、昭和十年の卒業生である。この間、第一次上海事件、満洲事変などが起こり、



(右より)三井不動産常務取締役 山田喜志夫 評
論家 村松喬 東京大学教授 樺村魁 農林省農業
技術研究所長 江川友治 東京大学教授 丸尾文治

十五年戦争の幕が上がっていたわけだが、中学生たちはまだのんびりしていた。

当時の静中の校舎は木造の古いもので、いま思い出すとなかなか味のある建物だった。春は桜の老木が若返って校庭を眠たげに色どり、冬は澄んだ空気の彼方に白雪の富士が浮かび上がったものだが、校舎は戦災で焼けた。

この五人のうち、私を除く四人は優等生だった。私は数学がニガ手で劣等生四年が終わると五年を放棄して早稲田の文科へ逃げこんだが、

彼らはガッチリ五年生をやり高校から東大へ進んだ。

だがいま私が「東大撲滅論」者なのは彼らへのヒガミからではない。私たちが

のころは、だいたい劣等生の方が幅をきかせて威張っていたのである。(村松 喬記)

(写真と文は文芸春秋より)

五一回

誌友の皆さま、久しく御無沙汰しております。今回の会誌の発行で幹事には御苦労さまです。私たちは戦後早くから静岡在住者が中心となって卒業回次になみ「五一会」を作っております。幹事は数人ですが代表として本部の狩野安彦君が本当によく世話してくれ

原則として毎年秋ごろ静岡で例会を行っております。この五一会本部を母体として東京五一会が作られ既に十年以上になります。この発起人であり世話人は原崎郁平君ほかで、毎年の例会で二人づつ交代で幹事を互選、思いおもいの趣向で場所を選んで集まっております。東京および周辺の南関東に勤務または居住している私たちは合計四〇名ですが、めいめい仕事に家族にまた自己の健康に、それぞれ波乱の多い年代であり、なかなか一堂に会して会員があつた静中時代のことを語り合う機会がないのが残念です。

幸いに一同元氣の様で何よりです。さてこの関東支部はいわば縦

陽春の候、皆様にはますます御健勝にてお過しのこととお慶び申し上げます。

さて、この度、私は昭和五十一年度東京弁護士会副会長に就任いたしました。現下、司法、人権、公害問題等重要且つ緊急問題をかかえ、私は心を新たに、弁護士としての使命である基本的人権の擁護と、社会正義の実現のために精進いたす決意でございます。なにとぞ、今後共一層のご指導とご厚誼を賜りますようお願い申し上げます。

東京弁護士会副会長

名波倉四郎

64期

の会で、私たちの五一会は横の会ですが、同支部の結成を機に更に一層縦横の連絡を密にし、これからの人生をより充実した楽しいものにしようではありませんか。

(佐伯正剛記)

五二回

静岡で開催される同期総会及びゴルフ同好の一・二・三会コンペはこのところ数年来、毎年盛大に行なわれ、往時の悪童に戻って楽しい一時を過しているが、関東地区在住の同期会は数年前に三、四回位やっただけで、とぎれてしま

五十一年度年会費をお願い致します

近日中に年会費納入の御連絡を致します。本会運営の唯一の資金ですから御面倒でも納入方宜敷く御願致します。

静岡高同窓会関東支部事務局

東京都台東区東上野二一八一七
佛大雄内 電(八三四)五三三一

五三回

五十三回生は昭和十三年静中卒業、十六年乃至十九年に大学専門学校を卒業した期である。と云うことは、さきの大戦には真先かけて突入し終戦迄戦場に居た訳であつて、為に非常に多くの級友を失つて居る。

この事は我々が復員して故郷に帰つた時、友達達の消息を求める氣持も強かつたし、同じく生還して居た友達が相会う喜びを又言い様のないものにしたのであつた。

従つて五十三回生の会は戦後早くから始められたが、規約等を作つて組織を確立したのが四十一年であり、東京での級会を関東支部としたのが四十六年である。

現在五十三回同期会関東支部は連絡のとれて居る者だけで四十一名、毎年級会を盛大に催して友情を温めている。メンバーは三枝、佐野(東大)、片桐(北研)、宗像(日本医大)を始めとして医者が多い。実業界では大石新日本証券副社長、奥野大雄社長等、その他法曹界で木宮、海員組合の香林等々多士濟々である。

五十年は奥野君経営する所の麴町「なば」で行なつた。小野、大石、大橋、桜井、白鳥、島田、杉

山、手島、徳永、虎岩、野崎、橋本、益田、望月、森下、山膏、月見里、奥野の十八名が集まり、中には初出席のものもあつて卒業以來相会の喜びやら娘の縁談やら商売の話やらに時の経つのを忘れて楽しんでたのであつた。今年もその内に集まらざあという声が出ている。近くお知らせしますので又大いにやりましようや。

(月見里得知郎記)

五四回

十数年前にならうか、一度、浅草の「菊水」で東京在住の有志が集まつて一夕を共にしたことがあつた。古い話で記憶も腫脹だが、集つた面々の中には大畑、佐野、下山清、瀧津、細井(旧姓中川)の諸君の顔があつたことを覚えてい

る。しかし、その後はほとんど会合をもつていないようだ。静岡の五四季会は毎年会合を開いているらしいが、東京・静岡と離れてしまつと、なかなか、会合に参加することもむずかしい。静岡の五四季会本部も東京に在任する同期生の消息を知りたがっていることでもあるし、こちらで東京五四季会も健在なことを知らせてやつたらどんなものであろうか。会つて旧交を温めることに不賛

五五回

(庵原悌次記)

学生の頃から数えれば関東に住んで三十余年、その間、三島の大東紡織に勤務した四年を除けばずっと此方なので、故郷に居た時間の割合はだんだん少なくなつてくる。人間の増殖と譬えられる東京で、各地の出身者の寄合世帯の世界の只中でもみ合いすり合ひしている中に、少年の頃に与えられた

風土の影響による夫々の人間形成の差違に氣付いてくると共に、自分もやはり一種特有のカラーを下地に持っているのだという反省に辿りつく。

下世話に、東北は粘り強さと人間味、茨城は意地っぱり、北陸は金にしまり、信濃は理窟屋が多く名古屋は始末で、大阪は堂々と利にさとく、遠く九州人には男尊女卑のてらいがある。

我が静岡は何千年黒汐に接し、温暖なる氣候、山海の幸あり、又風光明媚の故か、人心穏やか、中庸を重んじて激越を好まず、融和性に富み、貧富の差も少なく、豊かなる県人と云われているが、やや積極性と調気と粘りの点で他県人より薄い処があるらうか。戦後、石橋湛山が総理を一ヶ月許りやつた為に、総理・大将がちつとも出ないというジンクスがホンノ少シ破れた。然し、北の寒国で産業も産物も少なく、概ね豊かならざる地から、困苦に堪えて傑出した一握りの英雄が浮かぶのと較べ、そこに居住する人々にとつて果してどちらがより幸いであるのか。

春うらゝの日、浅間神社の池の周りの桜と、上野の山の桜とは同じように華やかであるが、街に集う市民の平常の心としては偉大な

る雑居村、東京そのものが絶えず走りいつも忙し過ぎるのに引き比べ、落付きとゆとりと穏やかで素直な、そして明るい楽天性は、静岡人の特性である。

人の性格や能力は先天性により多く基すくのか、或いは後天性によるのか。その道の専門家の見解は区々であるが、私はやはり生まれ落ちて播磨の頃子供の頃の環境の影響は、終生その人を拘束している様に思ふ。余程の注意とコントロールに成功しない限り、思考はある個有のパターンに添つて方向づけられ、進められて了うものゝ様だ。無意識のパターンを、訓練により意識的にコントロールするとしても、それはやはり幼少時に出来上がった脚本に基すくものであり、所詮、仏陀の掌の内を飛翔する孫悟空の金斗雲に過ぎないのかも知れない。

だが思いもよらぬ世界を知つたり、今迄想像もしなかつた視点から物を見たりすることができないだらうかと、摸索する手段の一つに読書学問一般があり、芸術があり、対話がある。出会いも大切である。久し振りの同窓会も亦、長い時空を隔てた後の、心なごむ出会いの一つであらうか。

(山本孫一記)

五六回

五六回関東在住者は五十年年度四十二名それぞれ同期会は設営幹事により回を重ねて来たわけですが今年度は従来の設営幹事と打合せの上近い内に盛大に開催したいと考えて居ります。小生昨年関東支部より五六期幹事の一人として指命をうけお手伝いしているわけですが、一人では如何ともしがたく成田氏の応援を得て今日に及んでいるわけですが、同期会を早急に開催し意欲的に活動したいと考えて居ります。五十一年度には同期の原田昇左右君が政界に出馬の年でもありますので、各期の方々にも是非お力添え願いたいと思えます。

(奥野 進記)

五七回

東京周辺に居住している同期生が五十名に達しようとしているのに、お互いに語り合う機会が少ないのは残念です。一畝を傾けながら親交を深める

と共に、青年の心にかえれば、ストレス解消にも役立つと思えますので、今春から各月一回程度の集會を計画しています。

お互いに多忙の身のこと、全員が一堂に会することは望むべくもないと思いますが、場所と日時を指定し継続して行なうことにより上記の目的を達したいと思えますので御出席をお待ちします。

写真は昨秋の第一回関東支部大

会に参加された五七期のメンバーです、顔が合ったとたんに、忽ち昔の友に還るのが、同期会の楽しみ最たるものです。

(酒井 博記)

五九回

五九回の東京近辺在住者は、もう大分前から少なくとも年に一度は新宿の中村屋あたりに集まっている。出席者は三十人ぐらい。二

次会も必ずといってよいほど用意されている。いつも決った顔ぶれというのではなく、去年こなかつた者が今年はという具合だから、まんべんなくほとんど全部が顔を出すのが嬉しい。

一昨年十一月には三十周年の記念に静岡の「浮月」で全同期会がひらかれた。各地からは参じた数は実に百十五人、数のうえでもこれ

活躍している有名な方 (59回)

- 関 寛治 (東大教授)
- 東洋文化史研究の第一人者
- 高橋 裕 (東大教授)
- 土木工学、特に河川の権威
- 中川直哉 (電気通信大教授)
- 宇宙起源の新学説で注目
- 清水 汪 (大蔵省銀行局)
- わが国経済界のにらみ役
- 菅原 操 (国鉄外務部調査役)
- イラン新幹線など交通計画の権威

ほどの盛況な同期会はまれだと噂された。当夜は、三浦現校長と諏訪、三上、北川の三旧師をも迎えたが、世話人大橋君などの演出で舞台上にそなえた一斗樽をぶちわり、現静岡岡副知事の要職につかれている諏訪旧師が、手ずから、ひしゃくで列をなす昔の教え子に酒をつぐという一幕もあった。また別にアルバム作製委員がもうけられ、各自がその家族と撮ったスナップを出席者の数だけ互にもちより、完全に交換しあった。

(青木静男記)

(五十一年度版)新名簿が出来ました 価格 六〇〇円 (送料共)

五十年度版は結成総会に間に合わせるべく作成しましたので不備の点多く、内容を充実させるため、当年、毎年新しい名簿を作成して行く予定です。

記載もれの方、移動のあった方、特に若い世代の方々の御連絡をお待ちして居ります。

静岡静岡高同窓会関東支部事務局

東京都台東区東上野二一八一七
 榎大雄内 電 (八三四) 五三三一



五七回 関東支部結成総会

六〇回

昭和二〇年三月卒業の六〇回は卒業生名簿も満足にない学年だ。従来も東京近辺在住者が何となく集まる会合はあったが、組織的に集まろうとしたのは今回がはじめ

てである。結局、四〇名の住所が確認され、二月二十六日、新橋の同窓菜館で二十五名が参加して関東地区の同窓会が開かれた。伝え聞いて静岡から二名の参加更に、ローマ、ニューヨークから

五十才、ようやく転勤も少なく、東京付近に定住するとともに、人生を振りかえる余裕がでてきた、そのタイミングにピッタリの今回の会だった。不思議なことは、三十年ぶりに会ったというのに、「おれ」おめえに違和感のないことだ。イメージチェンジしたのかと思ったのは最初の五分間だけ。いつのまにか少年の日に帰り「岳南健児一千の理想は高し富士の山」と肩組み歌って別れるのを惜しがり「今年中にまた開く」という幹事の確約でようやく会を閉じることができた次第である。(上杉重吉記)



六〇回 虎の門同窓飯店にて

一別以来三十一年というものもあれば、いや予科練に行った時からだから三十三年ぶりだという声もある。おれも、せがれも、二十三才で子持ちになって既に孫二人という友もあれば、高校入試は明日だから腰が落ちつかぬという教育パパもちらほらという状況。昭和二年生まれが中心だから

静中第六一回生の内約五分の一に相当する人が東京近郊に在職又は在任していることが最近判明したので、静岡勢も参加したクラス会東京大会を開きたいとの希望がたかまり、これにこたえて昭和五〇年五月一六日、九段の大周楼で開催した。

六一回

者原田昇左右氏 実弟原田竜二氏 (六〇回生) 及び、上杉重吉氏 (六〇回生) も飛入り参加し、期せずして連合クラス会の様相を醸した。散会にあたり静岡勢より「オーイ、静岡から新茶をもってきたぞ。一個づつもって帰って故郷の味を味わってくれ」の声に泣かされた。(中尾 昭記) (六一回 九段大周楼にて)



カコミのこわさ

各期の便りの中には、いわゆる有名人の紹介らしきものもチラホラ見られるが、59期はこともあらうに「活躍されている有名人方」などと、カコミで載せている。名士を何人出したかのコンクールではあるまいし、いささか鉄面皮だ

が、親爺のグループからはこんなのが出ているのだよと子供なんかに無邪気に自慢して喜べる年のせいでと思いたい。霞の裾にすべてを包む富士の寛容さこそ岳南健児同窓会の心意気。有名とかなんとかで差をつけられるようなものであってたまるか。(59期青木静男)

六二・六三回

戦中、戦後、工場動員に、軍隊に、また学校の焼失から転々としたためか、幹事のいたらなさからか、一部の仲間の集まりは可成あるとききますが、会合通知などの返信率30%、まとも具合の悪い年次ではないかと思えます。

さて、昨年六月三日、東京会館での関東支部発会式には大草、白鳥、山根、香川、三枝、大庭、寺尾、木下、鈴木惣吉、柴田有年、柴田克郎の11人が集まりました。

週刊文春の巻頭グラビアの主役になった「スカートをはいいたプロフェッサー」山根君が酒の肴となり寺尾君をはじめ名医が多いことで安堵する歳を確認、大場君の漫談まがいの話にも花が咲きました。その後、数人で有楽町レバンテへ行きゴルフ談議とはなりました。

結果は8月23日表われました。名門中の名門、東京クラブの土曜日を四組おさえました。結果は二組八名。現地集合が祟って豪雨の中とに角集合。集まれば着などをやってお天気待ちをしてはみても、気はそぞろで良い方に良い方に解釈して、小降りになったのをみすまして出陣。ところがそれらが本番台風で、これ程の風雨戦

は全員はじめて。高価な松の木がメリメリと倒れる中、あますところなく濡れて、とにも角にも一ラウンドだけはやったのです。年甲斐もなくと云おうか、まだまだお元氣と云おうか、でも、雨で来なかつた柴田有年君の賢明さを羨むことしきり。回つたのは三枝、勝山、鈴木、大場、木下、加藤、柴田の七名。スコアは鈴木惣吉君が良かったか、ブラックシャフトの加藤平三郎君が良かったかは記憶にありません。(柴田克朗記)

六四・六五回

年一度「七夕さまに集まりました」ということで在京生は七月七日に同期会を開いている。場所はここ数年、新宿の「今佐」と決めている。われわれもいまや四十台の半ばを過ぎ、社会の中堅として大活躍の諸君が多い。そこでその夜は、六時から十一時まで座敷を設け、たとえ用で遅くなくても自由に参加でき、特定の者だけで二次会に行くということもなく、最後までひとつ所で酒を酌み、大いに語り合うことになっている。参加者は例年三十人位。当夜は女将も静中のため大いにハッスルし、一緒に校歌をうたうことになってる。先年の会には本告先

生を迎え、宴会に先だって久しぶりに先生の味わい深い名講義を拝聴した。当夜は京王プラザ・ホテルに泊っていたき翌日先生にあって五十年ぶりという浅草散策のお伴をさせていただいた。

社会にあって悪戦苦闘している高等学校も、私たちのときからな

六七回

たとえば、陸軍幼年学校も旧制が私たちです。

は、少年の日のことを想い起こさせ、きわめて感慨深いものであった。(名波倉四郎記)

あづかるにしては、生まれてくるのが少々遅すぎ、逆に新制のよきになじむには、生まれてくるのが少々早すぎたというのが私たちの特徴のようです。

子どもたちをみるにつけても、当時の静中・静高のよさを想い、感慨深いものがあるのは私だけではないと思います。



六七回城内会 新橋第一ホテルにて

新制高校になった第一回卒業生が私たちです。そんな私たちも、すでに四十三、四歳、むかし流にいえば、やっと厄年が過ぎたところで、子どもたちが、ちょうど私たちが静中・静高時代の年ごろになりました。親バカというのでしょいか、そんな私たちが67期だけが特に変わった特徴をもっているとは思いません。ただ強いていえば、旧制時代のよき学校制度に

さて同窓会活動ですが、関東地区(東京、千葉、埼玉、神奈川)在住の同期生は、卒業生二百五十人中の七十人ぐらいいなるでしょう。毎年一回東京で同窓会をやるようになってから、もう十年近くになります。その時には、静岡在住の幹事数人が必ず顔をみせるし、また静岡で毎年やっている同期会やゴルフには関東地区の有志もできるだけ参加するようにしています。

ところで、これまで私たちは、仕事や家族のために忙しすぎる年令でしたが、これからは、少しゆとりをもって、むかしの仲間とのつながりを大事にしたいと思えます。(大石啓而記)



六八回

私たち静高68期は、旧制静岡中学校最後の入学者でありながら、一度も長谷町の校舎で授業を受けたことのない唯一の学年であり、また三年の間一人も下級生をもち



六八回城内会 新橋第一ホテルにて

たちである。

それはそれとして、68期東京支部としては、2月20日在京同期会と静高城内会をかねて、新橋第一ホテルに約30名が参集した。城内会とは、66期67期68期69期など、静中でもなく、静高でもなく、静岡城内高校生として、現在の静高の教育環境からみれば想像もつかないくらい劣悪な条件下で勉学に励み卒業していった同窓生を対象として結成された会である。

当日は、我が同期の野球部スター選手であった宗野徳太郎君の母校野球部コーチ就任祝いと激励会もかねていたため特に熱気に溢れ同君も「こしはらく甲子園出場を果していないが、優秀な素質をもつ選手もいるので、近い将来に

甲子園出場が果せると思うし、そのように努力するので、皆さんの暖い応援をお願いしたい」との抱負を述べ、盛んな声援をあげた。三年ぶりに東京で開いた会であるため全員話がはずみ愉快な一夜を過した。(雨宮明生記)

七一回

二十五年に一度しか記念祭をやらぬ学校で、七十五周年にめぐり会い市中を仮装行列でねり歩いた幸運をなつかしく想い、今年ちょうど四十才の成年組になるのがわれらが同期です。諸兄弟それぞれ社会・会社にあってはメタメタにオイソガ氏、使い使われごろとして、ひよっとしたら俺がいなくて会社は：なんて思い込んで頭張っているのです。

甲子園のスタンド応援はなかった三年間でしたが、その後、六大学では近藤君(自営)矢部君(新日鉄)が活躍、伝統を次代へ。映画にスカウトされたけどふつた白井君(鹿島建設)松井君(藤田観光)小池君(酒新聞)海野君(新日本証券)伊藤君(凸版印刷)などはいまでもつるんでいる仲間とのこと。

お便りにかえて
七〇回といえは齢も40才、複雑な気持ちで過ぎし年月を顧るこの頃だが、皆各分野で活躍している。わけても一昨年、芥川賞の誉れに輝く富田三木君(ペンネーム・三木卓)は誇り。創刊号に花をと早速一筆依頼。(中馬敏雄記)

七六回

76回卒はことし35才。一般の会社組織においては、みなさん実践部隊のリーダー格で余事に関わりいとまの全くない方ばかりです。私も当初の同期名簿づくりだけはとひと肌脱ぎましたが、公事、雑事に多忙をきわめ、幹事の役目も果せず困っております。

朝日の洞口君も幹事役でしたが先頃の横浜支店転勤で、連絡上の利が極めて悪くなりました。どなたでも結構です。幹事役を引き受けて下さいませんか。(曾根正弘記)

計報

- 謹んでご冥福をお祈りします。
- (27回) 寺尾 俊平 (51・3・22)
- (35回) 三田 藤吉 (50・9・11)
- (36回) 鈴木 万平 (50・12・3)
- (々々) 宮本 昇 (51・4・22)
- (40回) 野尻 康三 (50・12・20)
- (41回) 萩田 伸 (50・11・18)
- (43回) 高橋 一夫 (50・7・)
- (々々) 西谷 幸彦 (50・8・4)
- (47回) 卯木 太郎 (51・4・4)
- (53回) 望月 芳松 (51・4・18)

静中・静高同窓会
関東支部

祝 会報創刊号

トッパン・ムーア株式会社

取締役社長 宮 沢 次 郎 (42回)

東京都千代田区神田駿河台1-6

TEL (295) 2 4 1 1 (大代表)

鈴 与 株 式 会 社

取締役会長 鈴 木 与 平 (44回)

清 水 市 入 船 町 3 丁 目 1 2

TEL (0543) 53-3111 (大代表)

株式会社 講 談 社

取締役社長 野 間 省 一 (44回)

東京都文京区音羽2-12-21

TEL (945) 1 1 1 1 (大代表)

凸版印刷株式会社

東京都台東区台東1-5-1

TEL (833) 2 1 1 1 (大代表)

保険代理業 (特別総合代理店)

株式会社 京 華 商 会

取締役社長 岡 本 敏 興 (32回)

常務取締役 今 関 智 吉 (47回)

本店 東京都千代田区大手町2-2-1 TEL (241) 7751

分室 東京都千代田区丸ノ内3-3-1 TEL (211) 7831

大阪支店 大阪市東区淡路町1-12 昭栄ビル内

TEL 06-201-3 2 2 4

株式会社 東 電 社

取締役社長 岩 波 信 平 (42回)

東京都中央区日本橋2-1-21

TEL (271) 2 7 0 1 (大代表)

合同酒精株式会社

取締役副社長 堀 豪 三 (44回)

東京都中央区銀座6-2 合同ビル

TEL (571) 8 6 4 1 (大代表)

新しい計測システムを創造する

株式会社 千 野 製 作 所

取締役社長 青 木 清 明 (46回)

東京都豊島区西池袋1-22-8

TEL (986) 2 1 1 1 (大代表)

新日本証券株式会社

取締役副社長 大 石 巖 (53回)

東京都中央区日本橋1-17-10

TEL (273) 2 3 1 1 (大代表)

本田技研株式会社

取締役副社長 川 島 喜 八 郎 (52回)

東京都渋谷区神宮前6-27-8

TEL (499) 0 1 1 1 (大代表)